



【会社概要】

- ・所在地—本社/工場 江別市西野幌 120-8 RTN パーク内
- ・設 立—1971 年(昭和 46 年)4 月 7 日
- ・資本金—5,500 万円
- ・売上高— 15.1 億円(2017 年 12 月期)
- ・従業員数—97 名(2018 年 4 月現在)
- ・事業内容—電気機器の設計・製造
電気設備の施工・保守
計測機器の販売
研究・開発

- ・有資格者—技術士(電気電子部門)1 名、第 1 種電気主任技術者 1 名、第 3 種電気主任技術者 8 名、他有資格者多数
- ・主要取引先—北海道電力(株)他電力各社、ほくでんグループ各社、(株)東芝・三菱電機(株)他電気メーカ各社、(株)北弘電社他工事業社各社、ホクレン農業協同組合連合会他、北海道・札幌市他諸官庁
- ・審査登録—ISO9001(NJQ-173)北日本認証サービス(株)
- ・関連会社—東日本フィールドエンジニア(株)

今回の会員企業トップインタビューは、社会インフラである電力の安全・安定供給を支えるためのシステムや設備などの設計・製作・施工を主に研究・開発から保守まで手がけている北海道電気技術サービス株式会社 向井社長に伺いました。1971 年設立以来、高い技術力と情熱で電気の安定供給を支え続け、信頼を獲得し社会に貢献しています。

Q. 貴社の沿革をお聞かせください。

A. 1971 年 4 月に創業者の向井隆が 33 歳の時に北海道電力を退職して札幌市中央区宮の森にて設立しました。北電では、水力部門に従事していましたが、業務に必要な計測機器の製作を手掛けるため、北電の外に出てこれまでとは違った形で電気事業に貢献したいとの思いを強く持ち、従業員と切磋琢磨しながら現在に至るまで事業を継続してまいりました。

設立当時はアパートの一室に事務所を置きました。ほどなく手狭となったことで、1973 年 10 月に札幌市北区篠路に工場を移転。事業の拡大も順調に進んだことにより、1976 年 5 月には、空知郡南幌町に工場を再度移転し、そこで 37 年間操業しておりましたが、千歳川治水工事が計画されたため、2011 年 8 月に、現在の江別市に本社事務所・工場を移転しました。

Q. 設立後の製品開発、事業状況などをお聞かせください。

A. 設立当初は、デジタル位相計を開発、販売するとともに、発電所保守業務も受託していました。次に、マイコンによる水力発電所取水口自動制御装置の開発、納入やベクタースコープの開発、販売など、厳しい時期もありましたが事業を拡大してまいりました。

Q. これまで多数の試験装置や制御盤などの製品を開発されてきましたね。

A. 江別市への移転前までは、デジタル速度継電器や遮断器試験装置、配電用/発電用遠方監視制御装置、自動電圧調整器用子局装置(現在は同制御装置)等、様々な電力分野の製品を開発、納入しておりました。

最近では、小規模水力発電用の制御装置や制御一体型キュービクル、新型デジタル型不足周波数保護継電装置、瞬時電圧低下検出装置、バンク逆潮流保護盤などを開発、納入しております。

また、札幌市中央区の大通付近の無電柱化に伴い、地中多回路開閉器/変圧器(瞬時励磁方式)用低圧子局装置も開発、納入しました。

その他、農協向けに麦や馬鈴薯の受け入れシステムも納入しています。

Q. ESC の語源をお聞かせください。

A. 語源は、「Hokkaido Electric Engineering Service Co.,Ltd.」の頭をとって略称を「ESC」としております。

Q. 経営理念・経営方針など貴社の方針をお聞かせください。

A. 経営理念として明文化しておりませんが、それに代わる創業者が作成した社是があります。5項目で構成されており、日々意識して業務に取り組んでいます。

Q. 事業における重点施策、経営課題をお聞かせください。

A. 技術者の育成、技術継承が現在の課題です。最近では定期的に新人採用をしておりますが、一時期新人採用を手控えていたため、30 代後半から 40 代前半の人材が不足しています。ベテランの技術力をいかに若手に引継ぎ、仕事を継続して行くかが課題となっています。

Q. 電力の安定供給を支える製品開発や技術力、その確保策をお聞かせください。

A. 当社製品は、納品先において 20 年以上使われるものも多く、最新の技術から昔の製品に関する技術まで、幅広く技術を身に付けなくてはなりません。そのため、若手は先輩社員と行動を共にして日々技術の吸収に努めており、納入した製品の保守ができるようにしております。

新規の製品は、その開発内容によってはお客様と共同研究開発を行い、製品化していくことが多いです。そのためには技術の方向性を絶えず業界紙などから吸収し、各メーカーの技術セミナーなどにも出席し、また各部品の諸元表なども理解した上で何が最適かを常に考えながら開発を行っています。

Q. 貴社の社風、個性、社員気質などお聞かせください。

A. 自由闊達な社風で、人と人との間の垣根は低いと思っています。職人気質もあり、技術造詣も深いので、若手社員には先輩を見習って、情熱をもった技術者になってもらいたいと考えています。

Q. 社員の採用、人材育成方針をお聞かせください。

A. 毎年3~4名新卒採用を計画していますが、思うような応募がありません。高校、高専、大学など学校訪問を行い、先生方に業務内容の説明を行ったことで理解が進んできていますが、大手企業には勝てない状況です。

採用後、配属職場で3年程度技術を習得した後、本人希望や上司の判断を加味して他部署で更に技術の幅を広げるよう指導をしています。やりがいを感じて仕事に打ち込んでいるので、若手の定着率も高いと思っています。

OJT以外では、生産性本部も含め外部団体の研修への派遣などを通じて、知識・技能の育成に努めており、社内セミナー等で新たな視点、発想に繋がるよう共有化を図っています。

Q. 働き方改革が話題となっていますが、貴社の取り組みをお知らせください。

A. 一言でいうと受注を調整させていただき、業務の平準化を図っています。調整以前は、一部社員への作業の集中や残業・休日出勤など、働く環境には厳しさもあったことや業務に追われてOJTが十分に行えないこともありました。

今年、社長就任を機に、職場の環境改善を図るとともに、若手技術者の育成が社業発展には欠かせませんので、お客様のご理解を得ながら受注量の適正化を行った結果、残業時間も減少傾向にあります。

Q. 向井社長のご入社のご経緯をお聞かせください。

A. 大学を卒業後、20年以上ソフトウェアの開発に携わり、本州の部品メーカーに9年、北海道に戻って10数年経過した頃、当社メンバーから転職を勧められました。学生時代から当社を継ぐことは考えていませんでしたので、しばらく固辞しておりましたが、親孝行してきていないことに気づき、入社を決断しました。

ソフト畑から電気屋への転身は考えるところもありましたが、プライバシーマークの認証取得やISMSの勉強で培った情報セキュリティや社内ネットワーク等で貢献できることもあると思い、7年前の2011年に入社し、現在に至っています。

Q. 入社されてから特に印象に残る仕事・事柄をお聞かせください。

A. 印象に残る事柄はいくつかありますが、一つは京極発電所向けのロードセンター用機器の受注・製造です。

2011年、現在地に工場移転後、当該案件の受注が決定したのですが、製造する機器が工場内に収まらないことが判明し、移転直後でしたが工場を拡張したことです。

二つ目は、2013年9月にユコマンベツ発電所の取水口側の工事で、各現場多忙で人員が足りず、私も安全監視者として現地に行った時のことです。取水口は国立公園内にあり、現地までの道路もなかったため、道路測のロープを伝って山に入り、森の目印をたどって取水口に行き作業を行うのは貴重な体験でした。また、道路が無いことでキュービクルも分割してヘリで輸送し、現地での組み立ても体験することができました。工事初期から携わった方の苦労は並大抵のものではなかったと感謝しています。

Q. 25周年記念事業で「ESCの森」を開設されましたね。

A. 社会貢献の一つとして、当社の25周年記念事業として国有林分収育林制度を利用し、「ESCの森」を長沼町に開設いたしました。

Q. 2015年に関連会社を設立されましたね。

A. 昨今の自然エネルギーの普及に伴い、太陽光発電の保守点検やメーカーの工場応援を主体とする子会社を設立することとし、2015年4月に苫小牧市において「東日本フィールドエンジニア株式会社」を立ち上げました。

当初は、東日本エリアでの業務の受注を想定して名付けましたが、実際には国内に限らず海外にも技術者を派遣しており、仕事の依頼も多く、現在も技術者を募集中です。

Q. 設立から半世紀を迎えようとしています。今後の事業展開についてお聞かせください。

A. 当社は設立当初より、北電やグループ各社および業界各社から仕事を頂き、道内の電力の安定供給に寄与するため各種電力機器の開発販売、保守点検、機能改善等様々な作業を行ってきました。

電力インフラは社会を支える重要なものであり、今後も変わることはないと思われま

す。国の電力改革で各種発電事業者や新電力も増え、大きく様変わりしていますが、この変革の時代にあっても、軸足をぶらすことなく、電力インフラを支える技術力を高め、北海道の安定供給のために貢献していく考えです。



北海道電気技術サービス本社/工場